

一八八三年十一月二十八日(水)

タクール、聖ラーマクリシュナと睡蓮莊のケーシャブ・セン氏

ケーシャブの住居の前で——汝の道を行け

〔ケーシャブ、プラサンナ、アムリタ、ウマナート、ケーシャブの母、ラカール、校長〕

カルティク黒分十四日目。キリスト暦一八八三年十一月二十八日、水曜日。この日、タクール、聖ラーマクリシュナの信者が一人、睡蓮莊の門の東側の石垣のあたりを行つたり来たりしていた。誰かを待ちあぐねているような様子である。

睡蓮莊の北にあるマンガラという家に、プラフマ協会の会員たちが大勢泊まりこんでいる。睡蓮莊にいるケーシャブの病がこのところ非常に重くなっていた。多くの人が、今度はもう回復の望みはないのではないかと話し合っていた。

聖ラーマクリシュナはケーシャブをたいそう愛しておられるのだ！ 今日、見舞いにいらつしやることになつていた。ドッキネーション 南神村のカーリー神殿から来られるタクールを、この信者は、今か今かとお待ちしているのである。

睡蓮莊は環状道路の西側にある。だから時々、この信者はその道の方まで出て行つては、タクールの馬車がまだ見えないかと、向こうを眺めてくるのだった。大勢の人たちが道を行つたり来たりしていた。

道の東側にはビクトリア・カレッジがあつて、ケーシャブの協会の婦人会員や会員の娘たちが大勢ここに学んでいる。道から学校内の様子がかなりよく見える。学校の北側に、誰か身分のある英国人の家族が住んでいる広い庭のついた邸宅がある。その信者がその邸の方を眺めていたところ、この家族に何ごとか不幸なことが起つたらしかつた。ややあつて、黒い喪服を着た馴者きよしやと馬丁ばていが、棺桶を載せる葬儀馬車で到着した。一時間半か二時間くらいの間、いろいろと支度が整えられている。

この地上を離れて、誰かが去つて行つたのだ。だから、こういう支度しと度どをしているのだ！

その信者は物思いに沈むのだった——何處どこへ？ 肉体を捨てて何處どこへ行つてしまつたのか？

北から南の方へ向けて何台も馬車が通りすぎる。そのたびに信者は、あの御方が乗つておられるのではないかと、注意深く見つめるのだった。

時間はもう、およそ五時ころになつたろう。タクールのお乗りになつた馬車が着いた。ラトウとほか、一人、二人の信者がお伴していた。それから、校長とラカールも門から入つてきた。

ケーシャブの家の人たちはタクールをお迎えして、二階へお連れした。応接間の南側のベランダに寝椅子が一つおいてあつた。家の人たちはタクールをそこへお坐らせした。

### 聖ラーマクリシュナの三昧境——三昧状態で大実母と共に語る

タクールは長いこと坐つて待つていらっしゃる。もうケーシャブに会いたくて我慢ができないなくおなりだ。ケーシャブの弟子たちはうやうやしく申し上げる——「先生はちょっと休んでおられますので、いま少しあしましたら、こちらにもう間もなく見えられます」

ケーシャブは重症なのである。弟子たちや家人たちは、どれほど気を揉んでいることか。だがタクールは、もうケーシャブに会いたくて気もそぞろになつておられる。

聖ラーマクリシュナは、ケーシャブの弟子たちにおつしやつた。

「おいおい！ 彼がこちに来ることはないだろう？ わたしが奥に行けばいいじゃないか？」

プラサンナが丁重に申し上げる。

「はい、あの、間もなくこちらに来られますので——」

タクール「あっちへ行け。こんな風にしているのはお前たちだろう！ わたしが奥へ行くよ！」

プラサンナはタクールを引き止めるために、ケーシャブの話を始めた。

プラサンナ「ケーシャブ先生は別人のようになられました。あなた様がなさるよう、<sup>はなし</sup>大実母と対話をなさるのでござります。マードのおつしやることを聞いては、笑つたり泣いたりなさるのです」ケーシャブが宇宙の大実母と対話ををして笑つたり泣いたりするという話をお聞きになるや否や、タクールは前三昧状態になられてしまった。そして、見る見るうちに全く三昧にお入りになつた！

タクールの入三昧！ 寒い季節なので、緑色の羊毛の暖かい上衣をお召しになり、その上にまた巾広い羊毛ウールの肩掛けを羽織つておられる。体は微動もせず、視線は一点に固定している。完全に三昧の海に沈み切つていらつしやるのだ！ ずいぶん長い間、この状態が続いていた。三昧はなかなか解けそうもない。

とつぶり日が暮れてしまつた！ タクールは、ほんの少し平常に戻られたようである。となりの応接間には明かりがついた。タクールをこちらの部屋にお移ししなければと、皆、工夫をこらした。

苦心さんなん惨憺さんたんして、やつとこの御方を応接間にお移しすることができた。

部屋にはたくさんの立派な調度品がおいてある——贅沢な長椅子、ひじ掛け椅子、衣類棚、掛けガス燈、等々……。タクールに長椅子の一つに坐つていただいた。

長椅子にお坐りになると再び、外界の意識を失くしたように前三昧の状態になられた。

ややあって、長椅子の上からあたりをパチパチと眺められて、酔つたような調子でおつしやつた。

「前にはこういうものも必要だつた。今はもう、何の必要がある？

（ラカールの方を見て）ラカール、お前、来てたのかい？」

〔宇宙の大実母に会つて共に語る——靈的不滅(Immortality of the soul)〕

そう言われながら、タクールはまた何かを見ていらつしやる。そしておつしやる。

「おや、大実母ママも来ている！ また、ベナレス絹シルクのサリーなんか着て見せびらかして——。マー、そ

んな面倒なことはしないでおくれよ！ さア、静かに坐つて、坐つて！」

タクールは強い靈的興奮状態にあつた。室内はガス燈でたいそう明るかつた。プラフマ協会の会員たちがぐるりと取り巻いている。すぐ傍にはラトウ、ラカール、校長などが坐つている。タクールはその状態のまま、独白ひとりごとを言つておられる――

「体デーハと魂アーマン。体は生まれて、それから行つてしまふ！ 魂真我に死はない。ちょうどビンロウジユの果肉のようなものだ。果肉みが熟すと殻から離れている。未熟あおいのうちは殻にひついているもんだから殻から離すのにえらい苦労する。あの御方に会つたら――あの御方をつかんだら、自分がこの体だという感じがなくなるよ！ この体と真我たましは別だとはつきり感じるよ」

ケーシャブが入つてきた。

ケーシャブが東側のドアから入つてきた。プラフマ協会の会堂や市民会館タウンホールでの彼を知つてゐる人々は、この骨と皮にやせおどろえた姿を見て言葉も出なかつた。ケーシャブは満足に立つてゐることもできないようで、壁につかまりながらヨロヨロと歩をすすめた。やつとのことで長椅子の前まできて、そこにへたりこんだ。

タクールはその間に長椅子から下りて床に坐つておられた。ケーシャブはタクールをじつと見てから、床に額ぬかづいて長いこと併んでいた。それから頭をあげて坐つてゐた。タクールはまだ前三昧状態である。何かしきりに独り言ひとりごとを言つておられる。タクールは大実母と話しておられるのだ。

## プラフマンとシャクティは不異——人間としてのリーラー

すると、ケーシャブは精いっぱい声をはりあげて、「私は参りました。私はここに居ります」と言つて、タクールの左手をとり、自分の手のひらでなでさすりはじめた。しかし、タクールは神聖な愛に完全に酩酊しておられる。独白をしておられる。室内の会員信者たちは魅せられたように口をポカンとあけたまま、その言葉を聞いてゐる。

聖ラーマクリシュナ「<sup>「ヴァーディ</sup>制限」のあるうちは色々様々なものを感じる。ケーシャブ、プラサンナ、アムリタといったように——。完全智が生じたら、一つの意識だけを感じる。

一つの意識で見ると、この一つの意識が生き物と世界二十四の存在原理になつてゐることがわかる。しかし、力の現れには差異<sup>ちがい</sup>がある。あの御方があらゆるものになつてゐるのは確かだけれど、ある場所には多く、ある場所には少なく力が現れている。

ヴィディヤサーガルが、『では、神はある人には多くの力を与え、ある人には小さな力しか与えないのですか?』と言つたから、私はこう答えた。——『そうでなかつたら、一人に五十人がかかつてもかなわない場合があるのはどうしてだね? それに、お前さんのところに、どうしてわたしがワザワザ会いに来たりするのかね?』

あの御方がお遊びになる容器<sup>いれもの</sup>には、特別な力が現れている。地主さまは領地のどこにでも住みなさる。けれども、たいていは決まつた部屋に坐つていなさる。信仰者は、あの御方の居間だ。信者の心<sup>ハート</sup>

で遊ぶのがあの御方は大好きなんだ。あの御方の特別な力が現れるのは信者ハートの心なんだ。その人の特徴は？それは、誰かが偉大な仕事をしているところ。——そこに神の特別な力が現れているんだ。この根本造化力アディヤンチャカティと至高梵は不異だ。一つをのけて、もう一つを思うことはできない。輝きと宝玉のようにな！宝石をのけて宝玉の輝きを考えることはできない。また、輝きをのけて宝玉を考えることはできない。蛇と蛇動だ！蛇をのけて蛇動を考えることはできない。それに、蛇のくねくねをのけて蛇を考えることはできない』

## 〔プラフマ協会と人間のなかに神を見ること——修行者と成就者の違い〕

「根本造化力こそがこの生き物、世界、この二十四の存在原理になつていらっしゃるのだ。下降と上昇。ラカールやナレンドラやほかの若者たちに、わたしが夢中になつてているはどうしてだろう？ハズラーが言うんだ。——『あんたは、あれたちに夢中になつて追っかけ廻していらっしゃるが、いつ神様のことを思うんですか？』（ケーシャブはじめ一同笑う）

そう言われてみるとその通りなので、我ながらどうしたことかと気になつて仕様がない。だから、大実母<sup>マタ</sup>に聞いてみた。——『マー、どうしたんだろう？』ハズラーがなぜ、あれたちのことばかり思うのかと言います』その後でボラナートに質問した。ボラナートはこう答えた。——『バーラタにそなことが出でています。三昧から降りてきた人はどこへ立つていればいいのか？——サットヴァ性の信仰者のそばにいるのである』と。バーラタにそう書いてあると聞いて、わたしはすっかり安心した

よ（一同笑う）。

ハズラーのことも責められない。修行中は、『これではない、これでもない（ネーティ、ネーティ）』とすべてを否定して、全心を神に向けなければならないのだから——。でも、出来上がった境地では話は別でね、あの御方をつかんだ後は下がるも上がるも自由自在だ！ バターミルクからバターをとつてみるとこういうことがよくわかる——バターとバターミルクは元々区別ができるものだと。そして、あの御方こそがすべてのものに成っているのだということがはつきりわかる。ある場所には強く、ある場所には弱く現れているということもね。（訳註、バターミルク——牛乳からバターを採った後の残りの牛乳）

感情の海の上げ潮が、乾いた土地一面に水をかぶせる。前には舟で海に出るのに、曲がりくねつた河筋をつたつて行かなければならなかつた。洪水になれば、土地一面が水なんだ。そのときは、まつすぐに舟を漕げばいいんだよ。曲りくねつて、ひまをかけて行く必要はない。稻の取り入れがすめば、畦道をぐるりと廻つて行かなくともいいんだよ！ まっすぐ行きたい方へ歩いていていけばいい。

神をつかんだ後は、あの御方があらゆるものの中に見える。殊に人間のなかによく現れて見える。そのなかでもサットヴァ性の人に強く現れている。つまり、女と金に全く欲のない人には（一同沈黙）。

（原典註）バーラタ、つまり、マハーバーラタのこと。ボラナート氏は当時、カーリー殿の事務員をしていて、タクールの信者であった。そして時々、タクールのところに来ては、マハーバーラタの話をお聞かせしていた。ディーナー・ナート氏が他界した後、彼のあとをついでカーリー殿の出納長となつた。

三昧に入つた人がそこから下りてくると、どこで心を休ませたらしいだろう？だから、女と金を捨てたサットヴァ性の純粹な信仰者といつしょにいる必要があるんだよ。そうでなかつたら、三昧に入つた人はこの世でどうしていればいいんだい？」

「プラフマ協会と神の母性観——宇宙の大実母として」

「プラフマンである御方が根元造化力だ。無作用のとき、あの御方をプラフマンと呼んだり、プルシヤと言つたりする。創り、保ち、壊すとき、あの御方をシャクティとかプラクリティとか呼ぶ。プルシヤ(精神、男性原理)とプラクリティ(質料因、自然、女性原理)だ。プルシヤである御方がプラクリティなんだ。どちらも歓喜の権化だよ。」

プルシヤ、つまり男とはどういうものか悟つている人は、女はどういうものかよく知つてゐる。父親を知つてゐる人は母親をも知つてゐる(ケーシャブ笑う)。

暗闇を知つてゐる人は光明をも知つてゐる。夜を知つてゐる人は昼も知つてゐる。幸福とはどんなものかわかつてゐる人は不幸とはどんなものかもよくわかつてゐる。あんた、よくわかるだろう？」

ケーシャブ「ハハハハハ。はい、よくわかります」

聖ラーマクリシュナ「マーマーとは何のことだ？ 宇宙を、世界を産む大実母のことだ。その御方が世界をお産みになつて育てて下さるのだ。その御方は自分の産んだ子供たちをいつも護つて下さる。そして、ダルマ(正義)、アルタ(富)、カーマ(愛)、モクシャ(自由)——希むものを何でも与え

て下さる。ほんとうの子供は、母親から離れて暮らすことはできない。母親は何もかも知っている。子供は食べたり飲んだり、遊びまわっている。いろんなことはあまり知らないし、知る必要もない」

ケーシャブ「全くその通りですね」

### 昔の話——プラフマ協会でさかんに神の栄光を讃たたえることについて

聖ラーマクリシュナはお話しをなさりながら、すっかり普通の意識状態に戻られた。ケーシャブと笑いながら会話ををしていらつしやる。部屋中の人々はひと言も聞きもらさまいと、耳をそばだててじつと見ている。一同が全く驚いたことには、この二人は、「身体の具合はどうですか?」などといふような言葉は全然口にしない。ただもつぱら、神についての話ばかりなのである。

聖ラーマクリシュナはケーシャブにおつしやる——

「プラフマ協会の人たちは、やたらに神の栄光を数えたてるが、ありやどういうワケだろう? 『オーラ神よ、あなたは月をお創りになりました。太陽をお創りになりました。夜空の星々をお創りになりました』なんて——。どうしてあんなことをいちいち言う必要があるのかね。たいていの人は、庭を見てはほめるだけだ。庭の持ち主に会いたがるのは何人いる? 庭がすばらしいのか? 持ち主がすばらしいのか?」

酒を飲んでいい気持ちになつたら、わたしは酒屋にどれだけ酒がおいてあるか計算する必要はないんだ。わたしは一びんあればそれで十分なんだからね」

〔昔の話〕——ヴィシュヌ殿の宝石盜難とシェジヨさん(マトウール氏)」

「ナレンドラに会つたら、『お前のお父さんは何という名前だ? 家を何軒持つてゐる?』なぞというようなことは全然聞く氣にならない。」

わかるかい? 人間は自分の富や力を自慢に思つてゐるから、神様も富や力を自慢したいだらうと考へる。あの御方の豊かさや威力をほめそやせば、きっとお喜びになるだらうと思うわけだ。シャンブーがこう言つた。『私の財産を全部、神の蓮華のみ足もとに捧げきつて死ぬことができますように、どうぞ私を祝福して下さいませ』と。わたしはこう答えたよ——『お前さんにとっては財産は宝で、命から二番目くらいに大事なものだらうよ。それをあの御方に捧げるつて? あの御方にとつちや、こんなものは皆、木ぎれ、土くれ、紙きれ同然なんだよ!』

寺のヴィシュヌ堂に泥棒が入つて神像の金や宝石の飾りをごつそり盗んで行つた。シェジヨさんとわたしが、神様がどんな具合になつたか見にいつた。シェジヨさんが、『タヨリない神様だ! ほんとに仕様がない。お前さまの体から宝石飾りを全部もつていかれたというのに、どうすることも出来なかつたんですか!』と言つたから、わたしはあの人に言つてやつたよ。——『あんた、何てことを言うんだい! 神様の宝石飾りだ、神様の金飾りだと何度も言つてるが、あの御方にとってはあんなものはみな、土くれと同じなんだよ! 富の神ラクシユミーを妻として従えているあの御方に、あんたの僅かばかりの金が盗まれないようふる兵していろいろとでも言うのかい? くだらんことを言いなさんな』

神様は、富や力でどうにかなるものかね？ あの御方は、‘信仰’でどうにかなるんだよ。あの御方は何を求めていらっしゃる？ 金じゃないよ。慕う気持ち、愛、信仰、識別、離欲——こういうもの求めていらっしゃるんだよ」

〔神に対する様々な拝み方——〔二性を超えた信仰者〕トライア〕

「人は自分の想像しているような神を見る。タマス性の信者は、大実母が羊を食べるものだと思つてゐるから、いけにえに羊を捧げる。ラジヤス性の信者は、いろんなカレー料理をつくつて、ご飯を炊いてお供えする。サットヴァ性の信者は、仰々しいやり方で礼拝しない。彼らの祈りは他人に気づかれないほどだ。花がなければ、ビルヴァの葉とガンジスの水を供えるだけ。ムルキ（砂糖をまぶした揚げ米）を二つまみくらいか、バタシヤ（砂糖菓子）を二つくらい供えれば、それでいいんだよ。たまには神様のためにパヤス（乳粥）をこしらえることもあるけどね。」

「それから、この三つの性格を超越した信仰者がいる。その人は子供みたいなものだ。神の名をとなえることが、その人の礼拝なんだよ。ただ、あの御方の名をとなえるだけだ」

### ケーシャブとの会話——神の病院で靈魂の治療を

「ハツハツハ。——あんたが病気になつたのは、それだけの理由があるんだよ。体のなかをたくさんの靈的な思いが通つたからさ。そういうものが通るときには何事もないようだが、後になつてから体

が傷んでくる。わたしは何度も見たよ。大きな船がガンジス河を通ったとき、別に何ともないようだつた。ところが、オー神さま！ しばらくしてから土手にドボーン、ドボーンと凄い音をたてて波がくだけよせてきた。あれじやあ、きつと土手のどこかが壊れてしまつたにちがいない！

小屋の中に象が入ると、内部なかがめちゃめちゃになつてしまつ。『思いの象々』が体の中に入つて——荒らして、こわしてしまつ。

どういうことになるのか、わかるかい？ 火事が起つたときは、まず家の中の品物がボーボー燃える。それから、ワアワア大さわぎになる。智慧の火は最初、色欲や怒りのような悪いものを焼き滅ぼしてしまつ。それから、『我アハ』の念おもいを滅ぼす。それからいま一つ、大さわぎが起つりはじめる！ (訳註、死ぬ前の肉体の破壊を指す)

あんた、これで何もかもお終しまいだと思つてゐるのかい！ ちがうよ。病氣の痕跡あとでも残つてゐるかぎりは、解放されないよ。病院の名簿にあんたの名がのつてゐる間は、出て行くことはできない。病氣が完全に治らないうちは、医者ドクターの先生は退院さしてくれないよ。あんた、どうして名前を書かれてしまつたんだい！』(一同笑う)

ケーシャブはこの病院の話をきいて、何度も何度も笑つてゐた。笑いをこらえきれないような様子だつた。やめては、また笑い出すのだつた。タクールは再びお話しになる。

〔以前のこと——タクールの病氣とラーム医師の治療〕

聖ラーマクリシュナ「（ケーシャブに向かって）フリダイがよく、こんな法悦<sup>パーサ</sup>の様子は見たことがない。それに、こんなひどい病気も見たことがない、と言っていたが、昔、わたしは酷い病気をしたんだよ。恐ろしいような腹下しだつた。二百万もの蟻に頭をかじられているようだつた。でも朝から晩まで神の話をしていた。ナタゴルのラーム<sup>サンセイ</sup>医師が診にきてくれてね、わたしが坐つて分別<sup>バイチャール</sup>しているのを見て、せんせいは言つたつけ——『氣でも違つたのか。骨と皮ばかりになつて、まだ分別<sup>バイチャール</sup>しているのか！』

（ケーシャブに向かって）あの御方（神）の思し召しだよ。すべてはあなた（神）の思し召し。

すべては あなたの思し召し  
あなたは したいようにする  
あなたの仕事を あなたがするに  
人は ワタシがすると言う

夜露によくあたるようになると、庭師はバラの根元を掘つて土をとり除ける。露氣を吸うと木がよく育つんだよ。だから、あんたもきっと根をきれいにしてもらつてあるんだよ、ハハハハハ（ケーシャブも笑う）。その後で大きなことが起ころんんだろうな！」（訳註、バラ——優良園芸種のバサラ・ローズ）

〔ケーシャブを思つて涙するタクール——青ココナツツと砂糖をシッデーシュワリー女神に奉納〕  
 「あんたが病気になると、わたしは居ても立つてもいられないような気分になる。この前の病気のとき  
 も、わたしは夜明け前になるといつも泣いたものさ。大実母<sup>(ママ)</sup>！ ケーシャブがどうかしたら、わたしは  
 誰と話をしたらいいんだろう、と言つてね。カルカッタへ来ると、青ココナツツと砂糖をシッデーシュ  
 ワリー<sup>(誤註)</sup>に供えたものだ。大実母<sup>(ママ)</sup>にケーシャブの病気が治りますように、一生懸命に祈つたものだ」

ケーシャブに対するタクールの飾り気のない愛情と心づかいを耳にして、一同は驚いている。

聖ラーマクリシュナ「でも、今度はそれほどでもない、正直なはなし。二、三日は気になつたけれどね」

先ほどケーシャブが入つてきた東側のドアから、ケーシャブの年老いた母親が入つてきた。

そのドアのそばからウマナートが聖ラーマクリシュナに向かつて、声をはりあげて申し上げた。「お  
 母様がタクールにごあいさつしておられます」

タクールはお笑いになつた。ウマナートがまた申し上げる——「お母様が、ケーシャブの病気が治  
 るようにと言つておられます」

タクールはおつしやる——「至福の女神様<sup>(アーナンダ・マイ)</sup>に祈りなさい。あの御方が悲しみを除けて下さいますよ」  
 そして、ケーシャブに向かつて重々しい様子でこうおつしやつた——。

「あんまり奥の部屋にばかりいない方がいいよ。女子供のなかにいると気が沈むだろう。神さまの話  
 をしていれば気分がよくなるよ」

そして今度は、子供のように無邪気に笑つてケーシャブに向かい——「さア、手を見せてごらん

少年のようにふざけながら手をとつて、重さを計る格好をされた。——「アラ、あんたの手は軽いよ！ 悪人の手は重いそうだが……」（一同笑う）

ウマナートが入口のところからまた申し上げる。——「お母様が、ケーシャブを祝福して下さるようにお言つておられます」

タクール、聖ラーマクリシュナは、おごそかな聲音でおつしやつた——。

「わたしに何ができる！ あの御方が祝福して下さるだろうよ。あなたの仕事をあなたがするに、人はワタシがすると言う。」

神様は二度お笑いになる。一度目は、兄弟が土地を分けあうとき。——繩を張つて、こつちの方が私のもの、あつちの方がお前のもの！ 神様はこう思つてお笑いになるんだ——全世界はわたしのもの。その小つぽけな場所に繩をはつて、こつちは私のもの、あつちはお前のものなぞと言つている！ 神様はもう一度お笑いになる。息子の病気がたいそう重い。母親は泣いている。医者がきて母親に言う。『心配しなさんな、お母さん。私がよくしてあげますよ』

神が死ななうとお思いになつたら、誰一人、助けることなんかできないのに、医者は知らないんだ

（訳註）シッデーシュワリー——一八〇三年にシャンカル・ゴーシュがカルカッタ、ターンタニヤに建立した寺院（カーリーバリ）に祀られているカーリー女神。シッデーシュワリーは、成功を与えてくれる女神の意味。シャンカル・ゴーシュの曾孫（ひまご）が、スポドウ・チャンドラ・ゴーシュで、後のスマミ・スポダーナンダ。この寺院にはヴィヴェーカーナンダも何度か訪れている。

(一同沈黙)

ちょうどそのとき、ケーシャブは咳の発作におそわれた。なかなか止まらない。その苦しそうな音を聞いている一同は、自分たちの胸がしめつけられるようだつた。長いこと苦しんでやつとおさまつた。が、ケーシャブはもうそこに坐つていることができなかつた。タクールに向かつて、床に手をついて拝礼した。そしてまた、来たときと同じように壁や家具につかまりながら自分の病室に戻つていった。

### プラスマ協会とヴェーダにある神々

〔アムリタ——ケーシャブの長男——ダヤーナンダ・サラスワティーのこと〕

タクール、聖ラーマクリシュナのために甘いものが用意されていた。ケーシャブの長男がそばにきて坐つた。アムリタが言つた。「ケーシャブ先生の長男でございます。何とぞ、あなた様の祝福をお与え下さいませ。どうぞ、頭をなでて祝福してやつて下さいませ」

タクール、聖ラーマクリシュナは、「私は祝福なんてことはしないよ」とおっしゃつた。そして笑いながら少年の体を手でなせて下さつた。

アムリタ「ははははは、結構でござります。そのように体をなせてやつて下さいませ」(一同笑う)

タクールは、アムリタ等プラスマ協会の会員たちとケーシャブのことをいろいろお話になる。聖ラーマクリシュナ「わたしは、『病気が治るように』などといふようなことは、一切言えないんだよ。そういう能力ちからを大実母にお願いしなかつたからね。わたしはマーにいつも、『清い信仰をさす

けておくれ』と祈るんだ。

あの人（ケーシャブを指す）はたいした人だよねえ。金儲け専門の人からも尊敬されるし、修行者や聖者たちからも尊敬されている。ダヤーナンダに会ったことがある。別荘に来ていたときだ。『ケーシャブ・セン』、『ケーシャブ・セン』、言いながら部屋から出たり入りしたりしていた。——『いま、ケーシャブ・センが来るんだ!』と言つて——。ケーシャブ・センが、来るという約束をしたんだね。

ダヤーナンダは、『ベンガル語はガウル（北ベンガル）の言葉だ!』と言つていたよ。

あの人（ケーシャブ）は護摩供養やヴェーダの神々を認めていらっしゃらないね。ダヤーナンダはそのことについてこう言つていた。——『神はこれほど数限りないものをお創りになつたのに、『神々』は創れなかつたとでも言うのだろうか』と

そして、タクールはケーシャブの弟子たちに、ケーシャブの美点をあげて賞めてきかせるのだった。聖ラーマクリシュナ「ケーシャブは智恵の貧しい人じゃない。多くの人たちにこう言いなすつたよ。——『なんでも疑問があつたら、あそこ（タクールのところ）に行つて質問しなさい』と。わたしの態度もこうだ——『あの人間の徳が百万倍にも増えろ』と言つている。わたしが尊敬されたつて何になる?」

あの人は偉い人だよ。商売人からも尊敬されるし、出家修行者からも尊敬されてる』

タクールは甘いものを少し召し上がるがつてから馬車に乗られた。プラフマ協会員たちは外へ出てお見送りした。

階段を下りるとき、タクールは階下に灯火が点いていないのに気付かれた。すると、アムリタたち会員に、「こんなところは、どこも明るくしておかなければいけないね。明るくない家は貧乏になるよ。もう二度と、こんなことにならないように——」  
タクールは二、三の信者たちと共に、その夜、カーリー殿に向かつて発たれた。

### ジヤイゴパール・セン氏の宅を訪問

#### 家住期と聖ラーマクリシュナ

ケーシャブを見舞つた後、夜の七時ころ、タクールは馬車に同乗の何人かの信者たちと共に、マタガサ通りにあるジヤイゴパールの家にお立ち寄りになった。

ところで、タクールの日常生活は、見れば見るほど信者たちを感嘆させるのだった。終日、神の愛にひたりきつておられる。結婚式は挙げたけれども、法律上のレツキとした妻とは世間並みの生活をしていらっしゃらない。その妻を敬い、拝み、妻と共にただ神の話をしたり、讃歌をうたつたり、礼拝したり、瞑想したりしておられるのだ。マーヤーの世界とは一切、無関係なのである。神だけがほんとうに実在する実体であり、ほかのものはすべて実体ではないのだ、とタクールはさとつていらっしゃるのだ。金銭は言うに及ばず、金属で出来たものには壺やお皿ですらお触りになることができな

い。女性には触れることすらお出来にならない。もし間違つて触れるようなことがあると、シンギ魚の骨が刺さつた時のように、ズキズキと痛みが走るのだった。金錢や黄金が手にふれると、これまた手はちぢかんでしまい、急病が起こつたような様子で息を止めてしまわれる。その品物を投げ捨てるとやつと、再び元通りに呼吸をなさるのである！

信者たちは、どんなに考え思ひめぐらしたことか——。世間は捨てるべきものなのだろうか？ 学校へ行つて勉強したり、仕事を覚えたりするのは何のためなのだろう？ もし結婚しなければ、どこかに勤めなくともいいかもしだれない。でも、父や母をどうして捨てられよう？ それに自分は、もう結婚してしまつていて子供もあるからには家族を養う義務があるし——じゃあ、自分はどうすればいいのだろう？ 自分だって、一日中神の愛にひたつて満足して いたいのだ！ タクール、聖ラーマクリシュナを眺めていると、自分はつくづく考えざるを得ない。——何をしているんだろう、自分は！ この御方は、毎日毎日絶えることなく神様のことを想い考へていらつしやるのに、自分ときたら、毎日浮き世の俗事に駆けずり廻つて いる！ この御方に会つて いるときだけが、ちょうど曇り空に一時のぞいた青空の陽光のようなものだ。自分の陥つて いるこの人生のジレンマを、どんな格好で脱け出したらいいのだろうか？

この御方が自ら示して下さつて いるのではないか。何を今さら疑問があるというのか？

この砂の土手を壊すことが心のほんとうの<sup>のぞ</sup>希みなのだ！ 砂の土手は真実か？ 賴るべきものか？ 否——。しかし、捨てきれないのは何故だろう？ 力が弱いからだ。もし神をあれほど愛したら、も

1883年11月28日(水)

う何の計算も入る余地がない筈だ。ガンジス河に満潮の水が押し寄せるとき、誰がそれを防ぎ得るか。その神聖な愛に狂うほど酔つた聖チャイタニヤは、腰巾こしきん一つきりになつて他のすべてを捨てた。その愛のために、イエスは肉体を捨てて父なる愛に神のもとに昇つた。その愛のために、ブッダは王位を捨てて出家になられた。その愛がひとたび心に生え育つたならば、このはかない世間になど住んでいられようか。

そうだ、弱い人間に聖愛ブレーヴなど得られはしない。足を鎖でつながれて、世間から離れられずにいる人間に救われる方法はないのか？ そうだ、この愛すべき世捨て人、この偉大な魂のそばから決して離れてはいけないのだ。さあ、この方のおつしやることを聴こう。

信者たちは常々、こんなふうに考えているのであつた。タクールはジャイゴパールの応接間にその信者たちといつしょにお入りになつた。正面にこの家の主人のジャイゴパール、および彼の親戚や隣人たちが坐つていた。隣人の一人がいろいろ質問の用意をしているようだつた。この人がリーダーになつて会話をすすめていった。ジャイゴパールの兄、ヴァイクンタも同席している。

〔家住期にいる人と聖ラーマクリシュナ〕

ヴァイクンタ「私共世俗の人間に、何かご助言をいただきとうござります」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を知つて、片方の手で神の蓮華の御足につかまり、もう片方の手でこの世の義務を果たしなさい」

ヴァイクンタ「先生、この世というのは、ほんとうに錯覚なのでございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を知らない間は、この世は錯覚だよ。あの御方を忘れて、『私のもの、私のもの』と言つてゐるうちは、マーヤーに縛られて女と金に夢中になり、下へ下へと沈むばかりだ。マーヤーのなかでうごめいていて、脱け出す道があるので脱け出そうとも思わないほど無智なんだ！」

ういう歌があるがね――

造化の力のまぼろしに

われから虜になり果てて

この世に迷う人々は

ブラマーもヴィシヌもわからない

おもりを下げた網のなか

魚は群れて入りきて

出入の路はここにある

けれども魚はなぜ逃げぬ

カイコは蘿のなかにいて

破る気あれば脱け出せる  
けれどもそれにしがみつき

自ら作つた繭まゆで死ぬ

あんたら、この世がどんなに頼りなくはないものか、それぞれがよくわかっている筈だろう？  
一軒の家を見ただけでもわかる筈だよ。どれほどの人が来て去つて行つたことか！　どれほどの人が  
生まれて、どれほどの人が肉体を捨てて行つたことか！　この世のことは、今あつたかと思うともう  
無くなつてゐる！　はかないものさ！　どんなに『私のモノ、私のモノ』と言い張つて頑張つていたつ  
て、ひとたび（死の床で）目をつむつたらさいご、もう無いんだよ。別に何の義務もないのに、孫がい  
るからといってカーシーへ（巡礼に行くこともしない。『孫のハルはどうなる？』とか言つて――。）出  
入りの路はここにある。けれども魚はなぜ逃げぬ』だよ！　カイコは自分のつくつた繭まゆの中で死ぬ。  
見ろ、この世は迷いだ、錯覚だよ』

近所の人「先生、『片方の手で神につかり、もう片方の手で世間につかまる』、というのはどうし  
てでしょ？　もし、この世がはかなく無意味なものであるならば、片方の手をわざわざ伸ばして  
(世間に)つかまる必要はないと思いますが？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を知つた上でこの世で暮らすぶんには、ちつともはかなくはないか  
らさ。また、この歌を聞いてごらんよ――

心よ 君は耕す術すべを知れ

人間という名の未墾の土地を  
耕せば かぎりなく豊かに  
黄金こがねなす実りを獲るだろう

カーリーの名の垣根をめぐらせば

収穫が減ることはない

その垣根は ムクタケーシーのように力強く  
死の王ヤマさえ そば傍には近づけない

今日か よきまた百年の後には  
失つてしまふかも知れぬが  
ただ今は 与えられし田畠を  
ひたすらに耕しはげめよ

ムクタケーシー——、髪の毛を解いた者——の  
意でドゥルガ女神の別名

師からもらつた種を蒔いて

信仰の水をゆたかに注げ

心よ もしこのことが出来ぬなら

ラームプラサードの詩うたに従いて行け」

### 家住期に神を覺る方法さと

「よく聞いたかい？ カーリーの名の垣根をめぐらせば、収穫が減ることはない」だろう？ 神に任せきればすべては成就する。あの力強い不壊の垣根のそばには、死王ヤマさえも寄りつかない。それは、それは強い垣根なんだから——。あの御方をしつかりつかめ。そうすれば、この世は夢まぼろしだなんて感じなくなるよ。あの御方を知るということは、あの御方ご自身がすべての生き物と世界になつているのを知ることだ。子供らに食べさせるのは、ゴパール(幼児の姿の神)に食べ物を捧げるのと同じだ。父と母は、神とその妃めいだと思って仕えなさいよ。あの御方を知つてからこの世の生活をする場合は、妻と肉体関係をもたないのが普通だ。二人とも神の信者で、ただ神について話し、神とのふれあいを楽しんで暮らす。他の信者たちに奉仕する。すべての生き物、殊ことに人間のなかにあの御方がいらっしゃるのがわかつて奉仕の生活をするんだよ」

近所の人「先生、そんな夫婦は見たことも聞いたこともありません」

聖ラーマクリシュナ「あるよ、ごく稀だが——。俗っぽい連中にはそういう夫婦が見分けられない

のだ。でも、こういう生活を送るには、二人ともが良い素質を持っていることが必要だがね。二人とも神のよろこびを味わっているなら、こういう生活は必ずできる。こんな夫婦が一組できるためには、神の特別なお恵みがいる。そうでなければ、二人の間で年中イザコザが絶えないだろう。どっちかが離れて行くことになる。一人の意見が一致しなければ惨めなことになる。女房は夜昼なくこう言つてグチるだろう——『お父さんたら、どうして私をこんなところに嫁がせたのかしら！ 私も子供も満足に食べることもできない。私も子供もロクな着物も着られやしない。指輪一つだつて買つてくれやしない！ ほんとにあんたは、私を幸福にしてくれたわね！ 目をつぶつちや、『神様』、『神様』つてばかり言つていらっしゃいますこと！ もう、もう、こんな気違ひじみたことは止めていただきたいわ！』

一信者「そういう障害が確かにござりますね。それに、子供たちが言うことを聞かなかつたり……。そのほかにも邪魔がどれほどありますことか。先生、ほんとにどうしたらよろしいものでしようか？」

聖ラーマクリシュナ「世俗の生活をしていながら修行するのは、実際難しいことだ。キリのないほど邪魔なことがある。今さらお前らに、あれこれ言うこともないだろう。病気、心配事、貧乏……。それに女房とうまいかなかつたり、子供がバカだつたり、聞き分けがなかつたり……。でも、方法はあるよ。時々静かな処へ行つて、一人での御方に祈ることだ。あの御方をつかもうと、いつも心掛けていることだ」

近所の人「家を出なければなりませんでしようか?」

聖ラーマクリシュナ「すっかり、というわけではないが——。ひまがとれたらどこか静かな処へ行つて、一日でも二日でもいいから一人でいなさい——世間のことから一切関係を絶つて、誰かと世間話など決してしないようにするんだよ。そうやつて独居するか、さもなければ聖者修道の人と交わることだ」

近所の人「そういう聖者は、どうやつて見分けたらよろしいでしようか?」

聖ラーマクリシュナ「心と命と内なる魂をみんな神に捧げているお方が聖者だ。女と金を捨てた人が聖者だ。聖者は女人の肉體の目で見ないで、いつも女の本質だけを見る——もし女人の人のそばに行くようなことがあれば、母性ははおやとして眺めて礼拝する。聖者はいつも神を想い、神についての話だけする。そして、あらゆるものの中に神がいますことを知つて奉仕する。聖者の特徴といえば、ざつとこんなものだよ」

近所の人「長い間、静かな処に独居しなければいけないのでござりますか?」

聖ラーマクリシュナ「大通りの街路樹を見たかい? 植えてまだ若いちは、ぐるりに柵を廻しておく。そうしないと山羊や牛に食われてしまふからね。木の幹が太くなれば、もう柵はいらない。そうなれば象をつないでも折れやしない。人間も同じことだよ。心の幹が太くたくましくなれば、何の心配も恐れもないんだ。識別力が身につくように努力することだ。手に油を塗つてからカンタル(ジャックフルーツ)の実を割れば、手がベトつくことはない」

近所の人「識別とはどういうものでござりますか?」

〔ヴィヴェーカ〕

聖ラーマクリシュナ「神は真実在、そのほかは皆、虚偽——無いもの、これを分別することだ。真実在というは永遠不滅ということだ。虚偽とはその場限りのはかないもの。識別力が身に付いた人は、神だけがほんとうに存在する実体で、ほかは皆、本当は無いものだということがわかつてゐる。この識別力が出来てくると、どうしても神を知りたいと思うようになる。虚偽を愛しているうちは——つまり、肉体の快楽とか、名声評判とか、金とか、こういうものを愛しているうちは、神、真理、実在そのものであるあの御方を知ろうとする気持ちが起ららない。ホンモノとニセモノを見分ける気持ちが起これば、神を探す気になる。」

歌を一つお聞き——

さあ、行こう！ 私の心よ

すべての願いが叶うという

カーリー、カルパタルの樹の根元に  
行つて生命の四つの実を摘もう

四つの実——正義、富、愛、自由

〔ダルマ、アルカ、カーマ、モクシャ〕

「欲」と「無欲」の二人の妻は  
「無欲」の妻を連れて行き

「イヴェーカ  
識別」という名のその息子に  
真理の道を尋ねよう

はじめ(欲)の妻の子供らは  
遠くに離して説き伏せよう  
それでも聞き分けないとときは  
智の海原に沈めよう

「淨」と「不淨」の二人の妻と  
いつしょに神の部屋で寝るのはいつか  
張り合う二人が仲よくなれば  
おんはは  
大実母シャーマが顔を出す

善と惡 二匹の山羊は  
そこらの杭に結びつけ  
それでもメーメーさわぐなら  
智慧の剣で犠牲にしてしまえ

我執<sup>エゴ</sup>の父と無知の母

おまえの家から出て行かせ

マーヤーの洞穴<sup>あな</sup>に引き込まれぬよう

忍耐の柱にすがりつけ

プラサードは言う——このようにすれば

カーリーのもとに報告書<sup>レポート</sup>がとどき

愛しい御方<sup>(神)</sup>にえらばれて

こよなき勝友<sup>ともとも</sup>と 呼ばれよう

心が無欲——無執着になれば識別力がでてくる。識別力ができてると真理を探したくなる。すると、カーリーという全能の木の根元に行きたくなる。その木の下、つまり神のところに行けば四つの実が手に入る——簡単に摘みとれるんだよ——正義<sup>ダルマ</sup>、富<sup>アルタ</sup>、愛<sup>カーマ</sup>、自由<sup>モクシヤ</sup>。あの御方を体得めば、正義<sup>ダルマ</sup>、富<sup>アルタ</sup>、愛<sup>カーマ</sup>、自由<sup>モクシヤ</sup>、それに世間で暮らすに必要なものも皆、手に入るんだよ、もし望めばね

近所の人「でも、この世をマーヤー(仮現、幻象、迷)というのは何故でござりますか?」

## 〔制限不二論と聖ラーマクリシュナ〕

聖ラーマクリシュナ「神を体得まないうちは、『これでもない、これでもない』とすべてを捨てていかなければならぬ。神をつかんだ人は、あの御方こそがあらゆるものになつていらつしやるといふことを覚るんだよ——神様、生物、世界——一如だ。生きとし生けるものとこの世界は、あの御方以外のなにものでもない。一つのベルの実を殻と果肉とタネに分ける。もし誰かに、そのベルの実の目方は? と聞かれたら、あんたは殻もタネもとつて果肉だけを計るかい? そんなことはしないだろう。目方を計るときは殻もタネもいっしょに計るだろうさ。そして、このベルの実はいくらいくらいの重さだ、と言ふだろう。殻はこの世界のようなもの。人間はタネかな? 分別しているときには、『人間と世界は真我<sup>アートマ</sup>には関係ない』と言つたり、『実体のないものだ』と言つたりする。分別の途中では、『果肉だけが重要で値打のあるもの』、『殻やタネは何の用もないもの』、という風に感じる。さいのままで分別しつくすと、全部まとめて一つのものだということがわかる。そして、果肉をつくり出した精神が、殻やタネにもなつてゐるんだとわかる。ベルの実を理解するには、この三つ全部を知る必要があるわけだ。

下降と上昇だよ。バターミルクのなかにバターがあり、バターがあるからバターミルクもある。バターミルクといふものがあるならバターもあるんだ。バターといふものがあるならバターミルクもあるんだよ。真我<sup>アートマ</sup>があるなら、真我<sup>アートマ</sup>でないものもあるさ。

永遠不滅のものが無常の現象世界になつてゐる。無常の現象世界(Phenomenal world)がそのまま永

遠不滅 (Absolute) のものなんだよ。神として覚ったその御方が、人間や世界になつていらつしやる。それがわかつた人は、あの御方がありとあらゆるものになつていらつしやるのが見えるんだよ——父、母、子供、近所の人、動物、善と悪、清浄と不浄——何もかも全部さ」

〔罪の意識と責任 (Sense of Sin and responsibility)〕

近所の人「では、罪も徳 (善行) もないのですか?」

聖ラーマクリシュナ「あるさ。だが、無いんだ。あの御方が「我」を残しておきなさる場合は、差別感も悪行・善行の分別も残しておきなさる。ほんの一人か二人には、『我』というものをキレイさっぱり拭き取つておしまいになるが、そうした人たちにとつては、罪も徳も、善も悪もなんだよ。神を覚らない間は、差別の感じと善惡の分別がどうしてもあるわけだ。あんた方は、『私にとつては罪を徳も同じになつた。神様がなさる通りにしているんだ』などと口では言うかも知れないが、でも内心では、それは口先だけだということがよくわかつている筈だ。悪いことをしようものなら、たちまち胸がドキドキするよ。神をさとつた後でも、あの御方のご希望によつて、『召使いの私』を残してお起きになる。その場合は、信者は、『私は召使い、神がご主人』と言う。そんな人たちは、神に関係した話や仕事ばかりを好んでする。不信心な連中とは付き合いたがらない。神に関係のないことには興味がない。だが、これほどの信仰者にも、あの御方は差別の感覚を残しておおきになるんだよ」

近所の人「先生は、『神を知つてこの世で生活せよ』とおっしゃいますが、あの御方を知ることが

できるでしようか?」

〔未知と不可知(Unknown and Unknowable)〕

聖ラーマクリシュナ「あの御方は、この肉体の感覚器官や心では知ることができないよ。世俗の欲をすっかり捨てた清浄純粹な心で知ることができるんだ」

近所の人「どんな人が神を知ることができるのでしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「ほんとに、誰ができるんだろうねエ? わたしたちとしては、自分に必要なだけわかればそれでいいんだよ。わたしにや、井戸の水全部は必要じゃない。一びんあれば十分すぎる。砂糖の山に一匹の蟻ンコが行つた。蟻ンコにその山全部が必要だらうか? 一粒か二粒あれば、もう、もう、ありがたすぎるくらいさ」

近所の人「私どもはチフス患者のようなもので、一びんではどうも――。神の全部を知りたいと渴望しているのです!」

〔世俗――病人と薬――わたしにすべてを任せなさい〕

聖ラーマクリシュナ「それはそうだ。だが、チフスの薬もあるよ」

近所の人「先生、どんな薬ですか?」

聖ラーマクリシュナ「靈格者と交わること。あの御方の名を称え讃えること。いつも祈りを忘れぬ

こと。わたしはこう言つて祈つた——『マー、わたしは智慧など欲しくない。ここにあるあなたの智慧をみんな取りあげておくれ。そして、ここにあるあなたの無智をとりあげておくれ。マー、わたしにあなたの蓮花の足に対する純粹な信仰だけをさすけておくれ。そのほかのものは何にもいらない』病氣のあるところには薬もあるさ。<sup>バクティ</sup>ギーター<sup>18·66</sup>のなかである御方はおつしやつた。『これ、アルジュナ、わたしにすべてを任せなさい。わたしが君をあらゆる罪から解放してあげよう』と。あの御方に護つていただければ、正しい知性をさすけて下さる。あの御方が全責任をとつて下さる。どんな種類のチフスだつて退散するよ。われわれの知性や感覚である御方がわかるものだらうかね？ 一シア（1リットル）の壺に、四シアの牛乳が入るものかね？ あの御方がわからせて下さらなければ、われわれが逆立ちしたつてわかりやしないだらう？ だからいつも言つているように、あの御方に頼りきつて護つてもらえ！ あの御方のご希望通りにしていただき。あの御方は、その意思ですべてをなさる御方（イツチャマイ）なんだよ。あの御方の思し召しに逆らう力なんか、人間にあると思うかい？』